

Title	Psychological androgynyについて
Sub Title	
Author	三井, 宏隆(Mitsui, Hirotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1987
Jtitle	哲學 No.85 (1987. 12) ,p.185- 213
JaLC DOI	
Abstract	In this paper the studies of psychological androgyny were reviewed, in particular focusing on Bem Sex Role Inventory. Initially, androgyny was considered an ideal personality pattern wherein a person combined the socially valued stereotypic characteristics associated with both masculinity and femininity. The principal evidences that androgyny was good were the high self-esteem and high sex role adaptability. Recent literature, however, has increasingly acknowledged that early androgyny formulations need theoretical elaboration and that androgyny research contains a number of unresolved methodological problems.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000085-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Psychological androgyny について

三 井 宏 隆*

Psychological androgyny

Hirota Mitsui

In this paper the studies of psychological androgyny were reviewed, in particular focusing on Bem Sex Role Inventory. Initially, androgyny was considered an ideal personality pattern wherein a person combined the socially valued stereotypic characteristics associated with both masculinity and femininity.

The principal evidences that androgyny was good were the high self-esteem and high sex role adaptability.

Recent literature, however, has increasingly acknowledged that early androgyny formulations need theoretical elaboration and that androgyny research contains a number of unresolved methodological problems.

* 慶應義塾大学文学部助教授 (人間科学)

今日の社会において、早急な解決が求められている問題は少なくない。それらは政治的な条件や経済的条件、ときには社会的条件の変化が新たにもたらした問題であることもあれば、何かと口実を設けて解決を引き延ばしてきた問題が、いよいよその精算を求めている、といった場合もある。

いずれにしても、それらは我々の生活に大きな影響を及ぼしていることから、「問題解決の責務を果すように」との声高な責任追求の矛先は、心理学者にも向けられることになる。

そのような場合、心理学者（特に、社会心理学者）はどのような対応を示せばよいのであろうか。「それは私たちの手に負えない問題です」とか、「問題が難しすぎます」といった弁解が許されればよいが、「それでは一体何ができるのですか」と逆に詰問されることにもなりかねない。

社会心理学者と称する以上、「知らぬ、存ぜぬ」の頬かぶりでは、世間が納得してくれないからである。

アメリカではこの点について特に厳しいように思われる。たとえば、“The effect of segregation and the consequences of desegregation: A social science statement” (1953年) は、アメリカの最高裁判所が公立学校における白人と黒人の分離教育を憲法違反と判断する際に採用したと言われる社会科学者の意見書のことであるが、今日ではそれに対して厳しい評価が下されている。彼等の指摘したことは的はずれであったとか、問題の核心を捉えていなかったという手厳しい批判が聞かれるからである。

その原因は一体どこに求められるのであろうか。社会心理学者の社会性のなさか、それとも学問の性格によるものなのか。いずれにしても何時かは、まともに論じられなければならないテーマの一つである。

そこで本稿では、sex-role stereotype、とか sexism との関連で研究が進められてきた“psychological androgyny”の問題を取りあげることにより、社会心理学という学問の在り方について考えてみることにする。

Feminist psychology について

最近, feminist psychology とか, feminist social psychology といったタイトルの本が目につくようになってきた. feminist psychologist の立場から書かれた心理学, 社会心理学のテキストのことである.

feminist psychologist とは, ①feminist であると同時に, 心理学者である人びと, ②「feminism の問題をどのように考えているのか」ということが, 研究の進め方に影響を及ぼすような心理学の分野で研究をしている人びと, のことである (Parlee, M. B. 1975).

アメリカでは, そうした問題意識を共有する人びとの任意団体としては, “Association for Women in Psychology” が組織化されていたけれども, 学界という枠組のなかで明確に位置づけられたのは1975年のことである. それが APA (American Psychological Association) の第35部門にあたる “Psychology of Women” であり, その部門の機関誌が “Psychology of Women Quarterly” であった.

それでは feminist psychologist の学問上の原点は一体どこに求められるのであろうか.

まず指摘されることは, これまでの心理学の在り方に対する批判である. たとえば Weisstein, N. (1971) は, 伝統的な心理学に対して, 「男性中心の社会体制を温存し, 女性に対する偏見を強化する 役割を演じてきた」と手厳しく批判する.

また, 多くの研究者, 特に男性の研究者に対しては, 「世間一般の男性観, 女性観を無批判に研究のなかに持込んだだけでなく, それらが科学的な研究手続きを経て明らかにされた事実であるかのような幻想を与える仕事に協力してきた」と鋭く批判する.

こうした立場から, feminist psychologist が自らの課題としたことは, ①伝統的な心理学の枠組のなかでは無視されてきた現象や事実を feminist

の立場から、積極的に取りあげていくこと、②伝統的な心理学の枠組のなかで得られた知見を feminist の立場から再検討し、再解釈していくこと、③feminist psychologist の知見を伝統的な心理学の流れから切り離してしまうのではなく、後者の研究上の蓄積を有効に活用しながら、自らの研究を体系づけていくこと、などである (Parlee, 1975).

これは新たに「女性の心理学」(Psychology of Women) を打ちたてることが目的ではなく、男性をも含めた人間行動に関する心理学、すなわち、“nonsexist science” の樹立がその目的とされていたからである (Vaughter, R. M. 1976).

そうした feminist psychologist の研究テーマのなかで、多くの関心を呼び起こしたのが、Horner の研究と Bem の研究であった。

Horner, M. S. (1972) はこれまでの『達成動機』に関する研究が、専ら男性を被験者とした結果に基づいて論じられていることを批判し、女性の場合には男性と違って、『達成回避動機』(motive to avoid success or fear of success) といったものが強く作用していることを指摘した。すなわち、世間は女性に対して、達成動機に基づく行動パターンを期待していない節があり、女性自身もそうした雰囲気を感じると、課題達成事態においてわざと失敗したり、実力を出さないように自制してしまう、との指摘である。

他方、Bem, S. L. (1974) は性役割 (sex role) の研究を通じて、これまで社会的に望ましいとされてきた男性像、女性像をそれぞれ sex-typed と名づけ、それらを否定すると同時に、今後の在るべき方向としては両方の特性をあわせもつ “psychological androgyny” が望ましいと主張した。それはまた、今日の社会は旧来の役割分担を前提とするステレオタイプな男女観からの解放を求めている、との feminism 宣言でもあった。

これらはいずれも短期間のうちに、数多くの追試研究を生み出す所となった。それらの結果は必ずしも当初の命題を支持するものではなかったが

(Henley, N. M. 1985), 今日的な問題に対する心理学者のアプローチの仕方を知るうえで、興味ある材料を提供するものであった。

Psychological androgyny について

アメリカ社会では長い間、男らしいこと (masculinity), 女らしいこと (femininity) がそれぞれ精神的に健康な男女の印である、とされてきた。

しかしながら、近年のウーマン・リブ運動は、そのようなイメージはもはや時代遅れであり、そうしたこだわりこそが人間性の発達を妨げる結果となっていた、と批判し、新たに androgyny という概念を提唱した。⁽¹⁾

彼等によれば、androgyny とは男らしさ、女らしさといったことにこだわることなく、状況に応じて適切な行動がとれる人びとのことである。

Bem, S. L. (1974) はそれをうけて Bem Sex Role Inventory (BSRI) の作成に取りかかった。①まず、人びとが男性及び女性にとって好ましい (positive) と考えている性格特性を約200個収集した。②次に、大学生に対して(男女各50名), 「それらの性格特性がアメリカ社会では、男性(或いは女性)にとってどの程度望ましいこととみなされているか」についての判断を求めた(7段階評定)。③この評定値に基づいて t 検定を実施し、男性或いは女性にとって有意にポジティブな特性と判断された項目をそれぞれ20項目選択し、masculinity, femininity の尺度を構成する項目とした。④その他に、social desirability を測定する項目として20項目が追加され、合計で60項目からなる BSRI 尺度が作成されることになった(表1)。

この BSRI の実施にあたっては、60項目をランダムに配置し、それぞれ

(1) Androgyny の語源は、ギリシャ語の Andros=man, Gynē=woman に基づくものである。また、Brown, R. (1986) は androgyny が1970年代に脚光を浴びることになった伏線として、①「男でなければ、女」といったような一次元尺度に基づくM-Fスケールへの批判、②固定的な男女観に対するウーマン・リブ運動の異議申したて、③男女の性行動には違いはないとするキンゼー報告の公表、をあげている。

表 1. Bem Sex-Role Inventory (BSRI)

Items on the Masculinity, Femininity, and Social Desirability Scales of the BSRI (Bem, S. L. 1974, p. 156 より引用)

Masculine items	Feminine items	Neutral items
④⑨ Acts as a leader	⑪ Affectionate	⑤① Adaptable
④⑥ Aggressive	⑤ Cheerful	③⑥ Conceited
⑤⑧ Ambitious	⑤⑩ Childlike	⑨ Conscientious
②② Analytical	③② Compassionate	⑥⑩ Conventional
⑬ Assertive	⑤③ Does not use harsh language	④⑤ Friendly
⑩ Athletic	③⑤ Eager to sooth hurt feelings	⑮ Happy
⑤⑤ Competitive	②⑩ Feminine	③ Helpful
④ Defends own beliefs	⑭ Flatterable	④⑧ Inefficient
③⑦ Dominant	⑤⑨ Gentle	②④ Jealous
⑱ Forceful	④⑦ Gullible	③⑨ Likable
②⑤ Has leadership abilities	⑤⑥ Loves children	⑥ Moody
⑦ Independent	⑭ Loyal	②① Reliable
⑤② Individualistic	②⑥ Sensitive to the needs of others	③⑩ Secretive
③① Makes decisions easily	⑧ Shy	③③ Sincere
④⑩ Masculine	③③ Soft spoken	④② Solemn
① Self-reliant	②③ Sympathetic	⑤⑦ Tactful
③① Self-sufficient	④④ Tender	⑫ Theatrical
⑬ Strong personality	②⑨ Understanding	②⑦ Truthful
④③ Willing to take a stand	④① Warm	⑱ Unpredictable
②③ Willing to take risks	② Yielding	⑤④ Unsystematic

⑤ ○の中の数字は BSRI における項目番号を示す。
各被験者は「各項目が自分にどの程度あてはまるか」を7段階で評定する。

の項目について、回答者に「それがどの程度自分にあてはまるか」を自己評定するように求めた(7段階評定)。

採点方法は masculinity 尺度の平均値(M得点)と femininity 尺度の平均値(F得点)を算出し、その差の t 検定の結果に基づいて回答者は“masculine”, “androgynous”, “feminine” に3分類されることになった(表2)。

こうして分類が確定すると、その次は分類の妥当性の検証である。

Bem, S. L. (1975) は、①Asch型の同調性の実験では、男性は女性よりも他者の判断に左右されることが少ない、②子猫と遊ぶ機会が与えられた場合には、女性は男性よりもそうした行動をとることが多い、との仮説に基づき、一連の実験を行なった。その結果、①については、masculine と androgynous は類似した行動を示すが、feminine とは明らかに異なること、②については、feminine と androgynous は類似した行動を示すが、masculine とは明らかに異なること、が示された。Bem はこの結果に基づいて、androgynous と判定された人びとは、masculine 及び feminine よりも状況に応じた役割行動をとることができる、との結論を下した。

この点は、Bem, Martyna & Watson (1976) の幼児への働きかけ及び他人の話を聞くといった追試実験においても支持された所である。

また、Bem & Lenney (1976) は sex-typed (masculine 及び feminine)

表 2. BSRI に基づく被験者の分類 (数字は%)

	Stanford University		Foothill Junior College	
	Males (n=444)	Females (n=279)	Males (n=117)	Females (n=77)
% feminine ($t \geq 2.025$)	6	34	9	40
% near feminine ($1 < t < 2.025$)	5	20	9	8
% androgynous ($-1 \leq t \leq +1$)	34	27	44	38
% near masculine ($-2.025 < t < -1$)	19	12	17	7
% masculine ($t \leq -2.025$)	36	8	22	8

(Bem, S. L. 1974, p.161 より引用)

と分類される人びとは、作業課題を選択する際にも男性向きの課題、女性向きの課題といった形での性役割判断を優先させており、そうした判断をすることが自分にとってマイナスになることが判っていても、尚且つそれに固執することを明らかにした。

このようにして、Bem はパーソナリティの分野に androgyny という概念を導入したけれども、それに対しては次のような反応がみられた。

たとえば、① t 検定の結果を M, F 項目採用の判定基準としていることへの疑問、② masculinity 及び femininity 尺度を構成している項目群の妥当性の問題、③ BSRI の項目がすべて positive に価値づけられた性格特性から構成されていることに対して、negative に価値づけられる性格特性をも考慮すべきではないか、といった指摘がなされたからである。

また、Pedhazur & Tetenbaum (1979) は BSRI 尺度作成にあたっての問題点を次のように指摘する。

① BSRI は多くの項目のなかから男女間の評定値が有意に異なる項目を masculinity 或いは femininity を表わす尺度項目として採用する方法をとっているが、そうしたやり方には理論的な根拠が乏しいこと。

② BSRI は masculinity と femininity の2つの因子から構成されると主張するが、因子分析の結果はそれを支持していないこと(附表1)。

③ BSRI の項目選択の際に採用された基準(「各項目がアメリカ社会に住む男、女にとってどの程度望ましいか」と、自己評定に際しての基準(「各項目が自分にどの程度あてはまるか」とは必ずしも同じことを意味していないこと。

④ BSRI は理論的な裏付けをもたない尺度であり、masculinity, femininity といった相互に独立なカテゴリーの設定もまた、そうした尺度構成の手続きがもたらした便宜的なものであり、必ずしも社会がそれを求めているといった内容のものではないこと、などである。

他方、androgyny については、次のような問題点が指摘されている。

Kelley & Worell (1977) は、これまでの知見をみるかぎり、①androgynous と masculine に分類される人びとは同じような行動パターンを示しており、feminine 及び undifferentiated に分類された人びとの行動とは、明らかに異なっていると思われる。もしこれが正しいとするならば、androgynous が必要とするのは、feminine とは無関係に masculine と呼ばれる性格特性をもつことではないだろうか、②androgynous は masculine 及び feminine の性格特性をあわせもつことによって、sex-typed よりも状況に適した性役割行動を演じることができると仮定されているけれども、そうしたことが逆に葛藤をもたらし、適切な行動がとれなくなってしまうということはないのであろうか、と疑問を提出する。

さらに Locksley & Colten (1979) は所謂 “Psychological androgyny” の研究について、次のような問題点を指摘する。

①androgyny という概念自体が誤解を招きやすいものであり、研究者が主張するように、単なる便宜的な呼称とはみなされないこと。

②androgyny の測定方法は、特定社会のメンバーが受容する性ステレオタイプの度合を1つの目安としているが、そうした一般的な反応をもって個々人のパーソナリティの測度とすることは適切でないこと。

③masculinity, femininity はそれぞれ instrumentality と expressiveness に対応すると考えられているけれども、実生活においてはそうした固定的な男女の性役割行動によって説明される部分は非常に小さいこと。

④androgyny という概念の妥当性が社会的適応や精神的な健康と結びつけて論じられているけれども、たとえそうした結果が得られたにしても、それはあくまで予測妥当性を示しているのであり、構成概念の妥当性の証明にはならないこと。

⑤androgynous は伝統的な性役割概念にこだわることなく、状況に応じた行動をとりうるかとされているが、それは彼等がそうした行動をとることが社会的に望ましいことであり、報酬をもたらすことを知っているから

である、と主張する。

この点について、Jones, Chernovetz & Hansson (1978) は、「androgyny は果して社会的な適応を意味しているのであろうか」という疑問を質すために、男、女大学生に対して BSRI を含む一連の性格検査を実施した (N = 1404)。その結果、①男子学生の場合、sex-typed とされる masculine male の方が、androgynous male よりも社会的に適応しているとみなされること、②女子学生の場合には、androgynous female の方が sex-typed とされる feminine female よりも、社会的な適応性が良いこと、が見出された。彼等はこの結果に基づき、行動の柔軟性 (flexibility) 及び社会的適応性は androgyny よりもむしろ、masculine と結びつけて論じられるべき問題ではないか、と主張した。

Silvern & Ryan (1979) もまた、同様な知見を報告しており、女性の場合には androgynous が adjustment に結びつくけれども、男性の場合には、そうした傾向は見出されなかった、と述べている。

さらに、Lubinski, Tellegen & Butcher (1981) は重回帰分析の手法を用いて、BSRI の簡略版から得られた M, F 得点と、emotional well-being を測定するための3つの尺度得点 (well-being, stress reaction, alienation) との関係⁽²⁾を分析した。

その結果、BSRI の M 得点のみが well-being の度合を示す指標として有効であること、が明らかにされた。

一方、Whitley, B. E. Jr. (1983) は性役割志向性 (sex-role orientation) と精神的健康度 (ここでは self-esteem を well-being の指標として採用) との関係を示すモデルとして、④congruence model……性役割志向

(2) Short Bem Sex-Role Inventory とは、因子分析の結果を参考にして作り直された30項目からなる尺度であり、masculinity, femininity を測定するための各10項目と、採点には直接関係がない10項目から構成されている。また、ここで使用された emotional well-being の3つの尺度は Differential Personality Questionnaire からとられたものである。

性がジェンダーと一致するときのみ、well-being は高まる、⊖androgyny model…ジェンダーにかかわらず、性役割志向性が masculinity と femininity の両面を強く取り込んでいるときに、well-being は最大となる、⊕masculinity model…masculinity の特性を強くもつ度合に応じて、well-being は高まる、の3つを提示し、メタ分析の手法によって35個の関連研究を分析した。その結果は masculinity model を強く支持するものであった。

Bem の反論及び新たな理論展開

こうした批判に対する Bem の回答及び反論は次の通りである。

まず、「M得点とF得点との間に有意差が見出されない場合をすべて androgyny として一括してしまうことは適切でない」との指摘に対しては、M得点とF得点が共に中央値以上の場合 (H-H群) のみを androgyny として分類することに同意した。⁽³⁾

その理由は、H-H群はL-L群と比べて、①自己評価 (self-esteem) 尺度の得点が有意に高いこと、②子猫と遊ぶ場面においては、子猫に対する働きかけが有意に多く見出されたこと、③自己開示の度合が有意に高いこと、であった (Bem, 1977)。

一方、Pedhazur & Tetenbaum (1979) 及び Locksley & Colten (1979) の批判に対しては、次のような反論を展開している (Bem, 1979)。

①「BSRI の作成手続きは非論理的である」との指摘に対しては、BSRI の作成目的は理論的に男女の在るべき姿や方向性を明示することではなく、アメリカという社会に住む人びとが、そこで男性的 (或いは女性的) とみなされている性格特性を自分のこととして受け入れている度合を示す尺度

(3) androgyny の操作的定義の問題については、Spence & Helmreich (1979a) の論文がある。また、Taylor & Hall (1982) もこの問題について論じている。

づくりにあったことから、そうした批判はあてはまらないこと。

②「BSRI の因子分析結果は必ずしも masculinity, femininity の 2 因子に集約されていない」との指摘に対しては、masculinity, femininity が次元性を意味していない以上、そうした分析結果は必ずしも BSRI を否定することにはならないこと。

③「sex という分類基準が社会のあらゆる分野で強い影響力を及ぼしている現状を考えるならば、androgyny を望ましい sex の在り方と仮定し、それを証明しようとする BSRI の研究意図は、問題の本質を正しく捉えていないことになる」との批判に対しては (Locksley & Colten), それを大筋において受け入れる所となった。すなわち、現代社会においては、いずれの sex からも解放された存在を仮定すること自体、非現実的であるとの指摘を認め、「androgyny は masculinity, femininity という考え方が実質的な意味合いをもたなくなるまでの過渡的な概念である」として、androgynous が sex-typed とは独立な存在であるとの見解を否定した。

こうして Bem はより一般的な立場から、性別化現象の問題にアプローチする必要性に迫られることになったけれども、そうしたなかで新たに提唱されたのが Gender schema theory であった。

性役割発達理論、或いは性別化 (sex typing) 理論としては、これまでに、①精神分析理論 (Freudian-identification), ②社会学習理論 (Social learning), ③認知発達理論 (Cognitive-development) が提唱されていた (表 3)。

それに対して、Bem が提唱する Gender schema theory は社会学習理論と認知発達理論の主張を取り入れたものであり、その内容は次のように要約されている (Bem. 1981)。

①性別化のプロセスは生物学的な意味での男 (或いは女) が、社会が求める男らしい人 (女らしい人) に形成されていくプロセスに対応していること。

表 3. 性 役 割 発 達 理 論 の 比 較

	Freudian-Identification	Social Learning	Cognitive-Development
Role of Innate Characteristics	Large role: anatomy is destiny; body structure determines personality	No role	Small role: cognitive maturation; structuring of experience; development of gender identity.
Role of Child in Learning Process	Active	Passive	Active
Motive	Internal: reduces fear and anxiety.	External: reinforced reinforcement. Internal: expected reinforcement.	Internal: desire for competence.
Performance of Learning	Very permanent and irreversible.	Permanent only if external reinforcement maintain behavior; difficulty in changing comes from internalized self-reinforcement and conditioned emotional responses.	Semi-permanent once schemata are stabilized; change depends on presentation of discrepant information and on the child's cognitive maturity.
Sources of Learning	Parents or parent surrogate	Parents as well as the larger social system.	Parents and the larger social system in interaction with the child's cognitive system.
Age of Learning Sex Identity	By 4 or 5	Throughout life, but every years are very important	Throughout life, but years between 3-20 are most important; years between 6-8 and 16-18 are crucial for change in stereotypic beliefs.

(Doyle, J. A 1985, p. 74-75 より引用)

②性別化行動はジェンダーに関係したスキーマを優先させる情報処理様式 (gender-schematic processing) に由来していること。

③性別化行動は幼児期の早い段階において学習されることから、逆の意味でそれは固定したものではなく、修正可能なものとみなされること。

④sex-typed と分類される人びとを他の人びとから分かつのは、彼等が男らしさ、女らしさといった性格特性をどの程度有しているかによってではなく、彼等の自己概念及び行動が gender schema によって統合されている度合においてである。すなわち、sex-typed と分類される人びとは、自らの世界を masculine, feminine といったカテゴリーに照らして解釈する傾向の強い人たちのことである。

こうした主張を支持するものとして提出されたのが、次の実験結果であった。

事前に実施された BSRI の結果に基づき、大学生 (男女各48名) が被験者として実験に参加した。彼等には61個の単語が3秒間隔でランダムに提示され、後でそれについての記憶テストが実施されると告げられた。単語の内容は16個の固有名詞、15個の動物名、15個の動詞、15個の衣服に関するもの、から構成されており (gorilla, hurling, trousers など)、それぞれの $\frac{1}{3}$ が masculine, feminine, neutral な意味合いをもつように選択されていた。従属変数は被験者がこれらの単語を再生するとき、どのようなまとめ方 (clustering) をしたかであった。実験結果は予想通り、sex-typed と分類された人びとは、他の人びとと比べて、gender schema に基づく情報処理様式を優先させていることが示された (図1)。

このようにして、Bem は non-sex-typed (androgyny) の研究から、sex-typed の研究へと方向を転換させることになったけれども、その理由は Bem 自身が androgyny という概念の限界を認めざるをえなかったためでもある (Bem, 1983, 1985)。

すなわち、androgyny の導入は当初男であるか、女であるかによって、

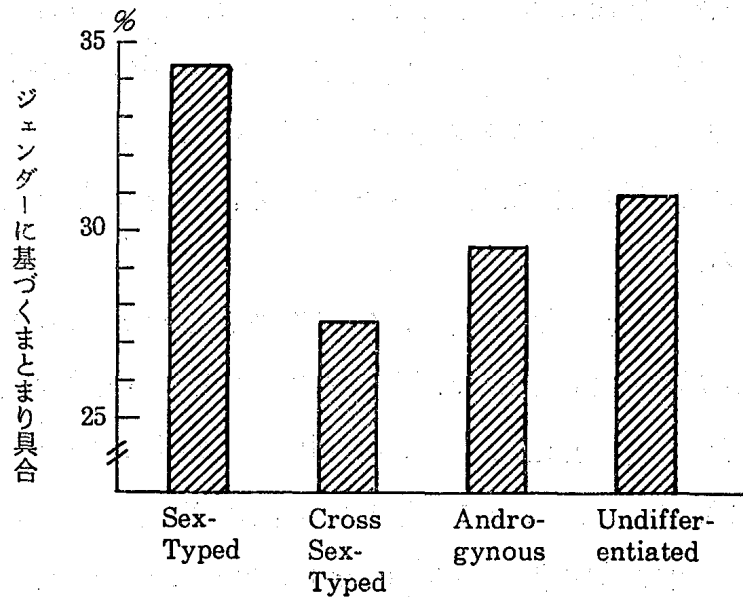


図1. Gender schema theory を支持する実験結果
(Bem,1981, p. 357より引用)

臨床場面での取り扱い方が異なるといった状況を否定し、より進歩的な考え方を提示したものとして歓迎されたけれども、やがて次のような概念上の問題点が判明する所となった。つまり、①androgyny を強調することは、人びとに自分の sex だけでなく (masculine or feminine)、他方の sex にふさわしいとされている生き方をも要求することになり、その結果、二重の性役割課題を強いるものであると解されたこと (doubly incarcerating prescription to be masculine and feminine)、②androgyny という考え方のなかには、人びとは生れながらにして masculinity と femininity の特性を有しているとの仮定があり、両者のバランスを回復するという考え方自体、性別化現象を学習されたものとみなす Gender schema theory の立場とは両立しないこと、が明らかになったからである。

Spence らの研究

Psychological androgyny についてのもう一方の研究は、Spence らの PAQ (Personal Attributes Questionnaire) に基づく一連の研究である。

PAQは55項目からなる自己評定方式の尺度であり（5段階評定）、そこからはBSRIと同様に、masculinity及びfemininityの得点がそれぞれM得点、F得点として算出される仕組みになっていた。

ところで、このPAQ作成にあたっての基本的な考え方とその手続きは次の通りである。

大学生（男、女）を被験者として、彼等に①Sex Role Stereotype Questionnaire (Rosenkrantz, et. al., 1968)に基づいて作成された130項目のスケールを与え(たとえば, Not at all aggressive—Very aggressive など), それに基づいて, 最初に典型的な男性及び女性 (typical male/female), 次に理想的な男性及び女性 (ideal male/female) を評定するように求める。②まずそこから典型的な男, 女についての評定結果を分析し, 有意差が見出された55項目を抽出する。③さらに理想的な男, 女の評定結果に基づき, それらの項目を23項目からなる male-valued scale (independent, adventurous, self-confident など), 18項目からなる female-valued scale (emotional, strong conscience, gentle など), 12項目の sex-specific scale (aggressive, religious など) に分類する⁽⁴⁾。

Spence, Helmreich & Stapp (1975) はこの PAQ を用いて, ①masculinity, femininity は基本的には独立な次元を構成していること, ②男女共に, masculinity 及び femininity の得点が高いほど, self-esteem 及び social competence が高いこと, を明らかにした(表4)。

さらに Spence & Helmreich (1978) はこうした知見が中産階級出身者の多い大学生に限られた現象かどうかを検討する目的で, より多様な社会, 経済的背景をもつ高校生を対象にして調査を実施した所, ほぼ同様な知見をえることができた, と報告している(附表2, 3)。

(4) sex-specific scale は後に masculinity-femininity scale と改称された。また, 55項目の PAQ のうち, 1項目はいずれのスケールにも含まれなかったために, 下位スケールからは除外された。詳しくは, 三井(1986)を参照。

表 4. PAQ に基づく被験者の分類

	Low masculine- Low female	Low masculine- High female	High masculine- -Low female	High masculine- -High female
<i>Males</i> { n %}	72 30.8	30 12.8	64 27.4	68 29.1
Mean self- esteem	66.82	74.55	87.02	93.73
<i>Females</i> { n %}	56 20.7	104 38.5	30 11.1	80 29.6
Mean self- esteem	69.66	75.41	92.17	98.73

(Spence, et. al., 1975, p. 35より引用)

また, Spence, Helmreich & Holahan (1979) はネガティブに評価された性格特性を用いて作成した16項目の PAQ 尺度と, ポジティブに評価される24項目の尺度 (55項目からなる PAQ の簡略版) を一緒にして, 男女大学生に実施した. そこから得られた尺度値は通常 M^+ , F^+ , $M-F^+$ の他に, M^- , FVA^- , FC^- の6つであった.⁽⁵⁾ 次にこれらの尺度値とパーソナリティ尺度との関係を分析した所, 男女共 self-esteem と高い正の相関を示したのが M^+ , 次いで $M-F^+$, F^+ の順であり, 無相関であったのは M^- , 負の相関を示したのは FVA^- , FC^- であった. また neuroticism との間では, 高い正の相関を示したのが FVA^- , 高い負の相関を示したものが M^+ , $M-F^+$ であった.

それでは PAQ と BSRI の相違点はどこに求められるのであろうか.

Spence & Helmreich (1979b) は PAQ の適用範囲を非常に限定して考

(5) ネガティブな特性から構成された16項目の尺度の内容は次の通りである. masculinity-valued 尺度 (M^-) が8項目 (arrogant, boastful, egotistical, greedy, dictatorial, cynical, looks out only for self, hostile), femininity-valued 尺度は2つの尺度から構成されており, ①unmitigated communion 尺度 (FC^-) が4項目 (spineless, servile, gullible, subordinates self to others), ②verbal passive-aggressiveness 尺度 (FVA^-) が4項目 (whiny, complaining, fussy, nagging) であった. なお, この16項目とポジティブに評価される24項目を一緒にしたものは, EPAQ (Extended Personal Attributes Questionnaire) とよばれている.

えており、たとえば、「PAQは自己評定による性格テストの一種であり、それは男性にとって社会的に望ましいとされている instrumental な特性と、女性にとって望ましいとされている expressive な特性を測定する項目から構成されたものである。一般的には masculinity, femininity を測定する尺度とされているが、それは前記の項目群がその範囲内で両性の反応を有効に弁別しえたからである」と説明している。

さらに Spence, J. T. (1982) は、①PAQ が測定している instrumentality 及び expressiveness といった性格特性は、sex-role attitude, sex-role preference, global self-images of one's masculinity and/or femininity といったものとは、ほとんど相関がないこと、②instrumentality, expressiveness といった性格特性が習得される過程は gender identity や sex-role attitude, sex-role preference などの発達過程とは必ずしも対応していないこと、③ジェンダーに関連した多様な現象、すなわち男女差が見出されるさまざまな事象（態度、好み、行動、属性など）は、本来多次元的なものとみなされるべきであり、その測定にあたっては一次元尺度に基づく M-F 尺度では無論のこと、BSRI や PAQ の二次元尺度でも十分ではないと思われること、を指摘した。

こうした立場は Bem の BSRI の捉え方とは異なるものである。何故ならば、Bem は BSRI を非常に汎用性の高い尺度とみなしており、それによって gender identity, sex-role orientation, sex typing, gender schema といったものまでが測定可能と考えているからである。たとえば、BSRI で sex-typed と分類された人びとは gender identity が強く、ジェンダーに関係した情報の処理に際しては gender schema を優先させる傾向が強い、といった具合である。

これに対する Spence & Sawin (1985) の批判は、「Bem は一方で masculinity, femininity を一次元として捉える考え方を否定し、相互に独立な二次元尺度とみなすべきであると主張しておきながら (BSRI の提案),

他方ではジェンダーについての一次元な見方を温存しており、その限りでは、旧来の性役割観と何ら変わる所がない」というものである。

Androgyny 再考

人びとが自覚しているかどうかにかかわらず、sexism は社会のあらゆる分野に浸透している。ビジネスの社会においても、学問の世界においても、いざとなると、“女のくせに”とか、“女だから仕方がない”といった発言が飛び出してくる。

こうした事態を女性蔑視の証拠とみなす feminism 運動は、女であるが故に、社会的な不利益を被っている事例を取りあげて糾弾する一方で、女性の在るべき姿を模索してきた。

女が男になりきることは難しいので、女でありながら心理的には男である状態が望ましいとされ、その一例として“psychological androgyny”が取りあげられ、その長所が枚挙されることになったのである。やがてそれは男にも逆の形で強要される所となり、androgynous male (female) が男、女の在るべき姿として称揚されることとなったのである。

BSRI, PAQ といった尺度はこれに心理学的な裏付けを与えたものである。その結果、性役割志向性、性別化行動といったものが測定可能となり、このテーマについての研究は飛躍的に増大することになったのである。

Psychology of Women Quarterly, Sex Roles といった雑誌は、そうした研究活動に応えるために1970年代半ばに創刊されたものである。

しかし問題がない訳ではない。Lenney, E. (1979) は androgyny 研究は転換期を迎えていると指摘したうえで、今後の研究課題として次のことをあげている。①androgyny を自明のこととして受けとめ、異なる見解を受けつけようとしない傾向がでてきていること、②androgyny の概念定義、操作的定義をめぐる研究者の間に不一致がみられること、③安易な研究が横行し、混乱をもたらしていること、④androgyny の研究がパー

ソナリティ研究の主流から切り離された形で行われていること、である。

たとえば、今日のパーソナリティ研究の動向は、「人びとは状況に応じて、異なる行動を示す」との立場をとるのに対して、androgynyの研究においては「sex-typed と分類された人びとは状況の変化にかかわらず、同じように行動する」と考えられていること、などである。

また Taylor & Hall (1982) は②について、これまで単なる採点基準の相違であるとみなされてきた Bem の分類図式 (1974) と Spence らの分類図式 (1975) が、本来異なる理論的背景をもつものであり、関連研究もまた、そうした立場から整理しなおされなければならないと主張する。⁽⁶⁾

ところで、androgyny 研究は自己反省の段階に入ったと言われているが、そこでは一体どのようなことが論じられているのであろうか。

Brown, R. (1986) は androgyny という考え方は経験的な裏付けをえた発見 (discovery) ではなく、それまでの一次元 M-F 尺度に対する批判のなかで新たに産み出された発明 (inventory) である、と述べている。これは androgyny という考え方は研究者の間では受け入れられても、一般の人びとには本来なじまないものである、との批判の表明でもあった。

Wetherell, M. (1986) もまた、feminist の立場から androgyny 研究の問題点は「masculinity, femininity といったカテゴリーが、何故有意義なものとして人びとに受け入れられているのかを問うことなしに、徒らにその内容がどうかこうかを論じてきたことにある」と批判したうえで、BSRI を始めとする一連の研究はそうした実体のないもの (imaginary identity) にもっともらしい論拠を与え、イデオロギーのうえからもそれを強化する

(6) 一般的には、Bem 自身が Spence らの分類図式の採用を表明したことにより、Bem の最初の分類図式 (M 得点と F 得点の差の t 検定の結果を用いる) は放棄されたものとみなされている。しかし、Taylor & Hall は、Spence らの考え方は、2 要因の分散分析の考え方を借用すれば、主効果として表わされるものであるのに対して、Bem の考え方は交互作用効果として捉えられなければならないものである、と主張する。

手助けをしてきた、と批判する⁽⁷⁾。

こうしてみると、androgyny 研究は自己矛盾に陥ってしまったかのようにも思われるが、Kaplan, A. G. (1979) は新たに androgyny の発達説を導入することによって、この矛盾の解決を試みた。すなわち、心理治療にやってきた患者の多くが BSRI では androgyny に分類されていたことへの驚きから、androgyny の初期の段階は masculine, feminine に関わる特性が相互に関連をもたないままに並存している状態であり、患者はそれらを統合できずに、その両極端を行きつ戻りつしているとみなされること、しかし、より発達の進んだ段階においては (hybrid stage), これらの特性が有機的に関連づけられ、真の意味での統合された状態が見出されること、たとえば、“dependency tempered by assertiveness”, “anger tempered by warmth” といったように、一見共通性のないような特性が結びついて、第3のユニークな行動パターンを形成している場合である。

たとえば、Bem が理想とした、「物事の考え方が柔軟であり、状況に応じて適切な役割行動を効果的に果たすことができる人びと」は、androgyny のこの段階に位置するものとみなされる。

一方、Trebilcot, J. (1977) は androgyny のモデルとして、①mono-androgynism…単一のモデルがすべての人に理想例として提示されている場合、②polyandrogynism…典型的な masculinity (或いは femininity) を含めて、あらゆる組合せが許容されている場合、をあげている。前者が masculinity と femininity のバランスを重視する古典的な androgyny 観であるとするならば、後者はそうした制約を取り除いた現代的な androgyny 観である、とも言うことができる (但し、Trebilcot は両者の関係をこのようには考えていない)。

(7) Lott, B. (1981) もまた、androgyny に関する研究は、「学習された行動や傾向を feminine 或いは masculine と名づけることによって、現実にはそうした結びつきがあるかどうかにかかわらず、一群の行動パターンとの結びつきを信じ込ませる役割を演じてきた」と批判している。

以上のことを参考にして、問題解決の方向を考えるならば、その1つの方向は polyandrogynism とも言える立場を全面的に採用することであり、それによって masculinity, femininity に関する議論を棚上げにしてしまうことである。何故ならば、この問題に係わりあうかぎり、masculinity→masculine→male, femininity→feminine→female, といった性役割観が常に持出され、その現実的な主張を前にしては、如何なる議論も空論とみなされてしまうからである。

同時に, polyandrogynism の立場の採用は在るべき姿としてのモデルの提示を断念することであり、そのことはまた、男であるか、女であるかといった詮索を無用にすることでもある。これによって始めて、androgyny の問題は生物学的な対応づけという頸木から解き放たれることとなり、心理学、社会学のレベルにおいて論じることが可能となるからである。androgyny が性役割を巡る論議のなかで登場した徒花か、それとも質問紙法に基づくパーソナリティ研究がもたらした幻想であるかどうかは、今後の研究に待つべき所である。⁽⁸⁾

(8) Nicholls, Licht & Pearl (198) は方法論上の問題点として、androgyny を測定する尺度と well-being を測定する尺度の間にみられる項目内容の類似性を指摘しており、たとえ、そこから高い正の相関がえられたにしても、それは両者の関係を実証したことにはならないと述べている。一方、Sherif, C. W. (1982) はジェンダー研究に関する用語の混乱が多くの弊害をもたらしていることを指摘している。

引用文献

- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem, S. L. 1975 Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643.
- Bem, S. L. 1977 On the utility of alternative procedures for assessing psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 196-205.
- Bem, S. L. 1979 Theory and measurement of androgyny: A reply to the Pedhazur-Tetenbaum and Locksley-Colten critiques. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1047-1054.
- Bem, S. L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, 88, 354-364.
- Bem, S. L. 1983 Gender schema theory and Its implications for child development: Raising gender-aschematic children in a gender-schematic society. *Signs*, 8, 598-616.
- Bem, S. L. 1985 Androgyny and Gender schema theory: A conceptual and empirical integration. In T. B. Sonderegger (ed.) *Psychology and Gender*. (Nebraska Symposium on Motivation. Vol. 32). University of Nebraska Press. p. 179-226.
- Bem, S. L., & Lenney, E. 1976 Sex typing and the avoidance of cross-sex behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 48-54.
- Bem, S. L., Martyna, W., & Watson, C. 1976 Sex typing and Androgyny: Further explorations of the expressive domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 1016-1023.
- Brown, R. 1986 *Social Psychology* (2nd edition) Free Press.
- Doyle, J. A. 1985 *Sex and Gender: The human experience*. Wm. C. Brown Publishers.
- Henley, N. M. 1985 *Psychology and Gender*. *Signs*, 11, 101-119.
- Horner, M. S. 1972 Toward an understanding of achievement-related conflicts in women. *Journal of Social Issues*, 28, 157-175.
- Jones, W. H., Chernovetz, M. E. O' C., & Hansson, R. O. 1968 The enigma of androgyny: Differential implications for males and females? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 298-313.

- Kaplan, A. G. 1979 Clarifying the concept of androgyny: Implications for therapy. *Psychology of Women Quarterly*, 3, 223-230.
- Kelley, J. A., & Worell, J. 1977 New formulations of sex roles and androgyny: A critical review. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 1101-1115.
- Lenney, E. 1976 Androgyny: Some audacious assertions toward its coming of age. *Sex Roles*, 5, 703-719.
- Locksley, A., & Colten, M. E. 1979 Psychological androgyny: A case of mistaken identity? *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1017-1031.
- Lott, B. 1981 A feminist critique of androgyny: Toward the elimination of gender attribution for learned behavior. In C. Mayo & N. H. Henley (Eds.) *Gender and Nonverbal Behavior*. Springer-Verlag. p. 171-180.
- Lubinski, D., Tellegen, A., & Butcher, J. N. 1981 The relationship between androgyny and subjective indicators of emotional well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 722-730.
- 三井宏隆 1986 ジェンダーの社会心理学 哲学, 83, 287-316.
- Nicholls, J. G., Licht, B. G., & Pearl, R. A. 1982 Some dangers of using personality questionnaires to study personality. *Psychological Bulletin*, 92, 572-580.
- Parlee, M. B. 1975 Review essay: Psychology. *Signs*, 1, 119-138.
- Pedhazur, E. J., & Tetenbaum, T. J. 1979 Bem Sex Role Inventory: A theoretical and methodological critique. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 996-1017.
- Rosenkrantz, P. S., Vogel, S. R., Bee, H., Broverman, I. K., & Broverman, D. M. 1968 Sex role stereotypes and self concepts in college students. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 32, 287-295.
- Sherif, C. W. 1982 Needed concepts in the study of gender identity. *Psychology of Women Quarterly*, 6, 375-398.
- Silvern, L. E., & Ryan, V. L. 1979 Self-rated adjustment and sex-typing on the Bem Sex Role Inventory: Is masculinity the primary predictor of adjustment? *Sex Roles*, 5, 739-763.
- Spence, J. T. 1982 Comments on Baumrind's "Are androgynous individuals more effective persons and parents?" *Child Development*, 53, 76-80.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1978 Masculinity and Femininity: Their

- psychological dimensions, correlates and antecedents. University of Texas Press.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1979 a On assessing "androgyny". *Sex Roles*, 5, 721-738.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1979 b The many faces of androgyny: A reply to Locksley and Colten. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1032-1046.
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Holahan, C. K. 1979 Negative and positive components of psychological masculinity and femininity and their relationship to self-reports of neurotic and acting out behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1673-1682.
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- Spence, J. T., & Sawin, L. L. 1985 Images of masculinity and femininity: A reconceptualization. In V. E. O'Leary, R. K. Unger., & B. S. Wallston (Eds.) *Women, Gender and Social Psychology*. Lawrence Erlbaum Associates. p. 35-66.
- Taylor, M. C., & Hall, J. A. 1982 Psychological androgyny: Theories, methods, and conclusions. *Psychological Bulletin*, 92, 347-366.
- Trebilcot, J. 1977 Two forms of androgynism. In M. Vetterling-Braggin, F. A. Elliston & J. English (Eds.) *Feminism and Philosophy*. Rowman & Littlefield. p. 70-78.
- Vaughter, R. M. 1976 Review essay: Psychology. *Signs*, 2, 120-146.
- Weisstein, N. 1971 Psychology constructs the female. In V. Gornick & B. K. Moran (Eds.) *Women in Sexist Society*. Basic Books. p. 133-146.
- Wetherell, M. 1986 Linguistic repertoires and literary criticism. In S. Wilkinson (ed.) *Feminist Social Psychology*. Open University Press. p. 77-95.
- Whitley, B. E. Jr. 1983 Sex role orientation and self-esteem: A critical meta-analytic review. *Journal of Personality and Social Psychology*. 44, 765-778.

附表 1. BSRI の因子分析結果 (4 因子解, 直交回転)

Trait ^a	Female factors				Male factors			
	1	2	3	4	1	2	3	4
1. Self-reliant	.360	.135	.492	.007	.043	.152	.524	.099
2. Defends own beliefs	.506	.176	.106	-.133	.060	.192	.422	.085
3. Independent	.442	.098	.480	-.049	.033	.247	.657	.053
4. Athletic	.168	-.008	.018	-.192	.035	.178	.086	.350
5. Assertive	.770	-.015	.015	-.073	.027	.680	.451	-.042
6. Strong personality	.689	.044	.058	.005	.064	.632	.466	.013
7. Forceful	.768	-.016	-.011	-.047	.002	.655	.377	.145
8. Analytical	.363	.006	.178	-.037	.162	.151	.177	.097
9. Has leadership abilities	.731	.096	.127	.051	.287	.568	.382	.149
10. Willing to take risks	.497	.075	.036	-.071	.214	.367	.405	.109
11. Makes decisions easily	.464	.145	.236	-.009	.058	.360	.251	.171
12. Self-sufficient	.468	.109	.460	-.119	.040	.187	.597	.110
13. Dominant	.687	-.080	-.106	-.128	.004	.648	.289	.074
14. Masculine	.133	-.265	-.064	-.507	.130	.101	.059	.416
15. Willing to take a stand	.615	.144	.122	-.071	.215	.315	.588	.115
16. Aggressive	.674	-.151	-.190	-.177	.101	.667	.227	.048
17. Acts as a leader	.738	.108	.086	.075	.213	.627	.366	.090
18. Individualistic	.519	.216	.217	-.197	-.029	.181	.431	.073
19. Competitive	.506	-.091	-.081	.233	.219	.398	.078	.340
20. Ambitious	.502	.083	-.045	.168	.301	.533	-.062	.109
21. Yielding	-.262	.340	-.093	.083	.249	-.203	-.010	-.024
22. Cheerful	.192	.423	.174	.007	.426	.234	.188	.205

23.	Shy	-.422	-.105	-.128	-.021	.055	-.400	-.102	-.007
24.	Affectionate	.187	.545	-.195	.146	.646	.280	-.065	-.116
25.	Flatterable	.134	.026	-.339	.183	.276	.075	-.188	-.215
26.	Loyal	.088	.396	.081	-.008	.199	.126	.422	.092
27.	Feminine	.120	.447	-.000	.511	-.065	-.056	.068	-.748
28.	Sympathetic	.080	.689	-.039	.024	.702	.037	.117	.062
29.	Sensitive to the needs of others	.115	.679	.066	-.097	.687	.131	.262	.021
30.	Understanding	.110	.713	.039	.129	.593	.036	.295	.090
31.	Compassionate	.127	.741	-.057	-.107	.743	.080	.242	.069
32.	Eager to soothe hurt feelings	-.031	.541	-.206	-.018	.534	-.024	.007	.053
33.	Soft-spoken	-.217	.309	.071	.149	.336	-.230	.042	.095
34.	Warm	.146	.626	-.077	.219	.734	.245	.018	.017
35.	Tender	.075	.727	-.057	.243	.755	.154	-.001	-.177
36.	Gullible	-.140	.198	-.480	-.044	.085	-.011	-.243	-.428
37.	Childlike	-.016	.025	-.461	-.120	.033	-.001	-.289	-.489
38.	Does not use harsh language	-.113	.221	.078	.068	.175	-.064	.128	.104
39.	Loves children	-.019	.434	.073	.045	.547	.068	-.048	.199
40.	Gentle	.004	.671	-.040	.189	.732	.049	.039	-.029
λ		6.93	4.90	1.67	1.07	5.46	4.46	3.69	1.79

Note. N = 400 (females) and 171 (males). BSRI = Bem Sex Role Inventory.

*To facilitate reading and interpretation, traits have been grouped by scale rather than as they appear on the BSRI. Thus, Traits 1-20 are considered by Bem to be masculine, and Traits 21-40, feminine.

(Pedhazur & Tetenbaum, 1979, p. 1011 より引用)

附表 2. Personal Attributes Questionnaire の簡略版

以下の24項目について、自分がどこにあてはまるかを5段階で評定する。

- ① Not at all aggressive — Very aggressive (M-F)
- ② Not at all independent — Very independent (M)
- ③ Not at all emotional — Very emotional (F)
- ④ Very submissive — Very dominant (M-F)
- ⑤ Not at all excitable in a major crisis — Very excitable in a major crisis (M-F)
- ⑥ Very passive — Very active (M)
- ⑦ Not at all able to devote self — Able to devote self completely to others (F)
- ⑧ Very rough — Very gentle (F)
- ⑨ Not at all helpful to others — Very helpful to others (F)
- ⑩ Not at all competitive — Very competitive (M)
- ⑪ Very home oriented — Very worldly (M-F)
- ⑫ Not at all kind — Very kind (F)
- ⑬ Indifferent to others' approval — Highly needful of others' approval (M-F)
- ⑭ Feelings not easily hurt — Feelings easily hurt (M-F)
- ⑮ Not at all aware of feeling of others — Very aware of feelings of others (F)
- ⑯ Can make decisions easily — Has difficulty making decisions (M)
- ⑰ Give up very easily — Never gives up easily (M)
- ⑱ Never cries — Cries very easily (M-F)
- ⑲ Not at all self-confident — Very self-confident (M)
- ⑳ Feels very inferior — Feels very superior (M)
- ㉑ Not at all understanding of others — Very understanding of others (F)
- ㉒ Very cold in relations with others — Very warm in relations with others (F)
- ㉓ Very little need for security — Very strong need for security (M-F)
- ㉔ Goes to pieces under pressure — Stands up well under pressure (M)

⊕ M, F, M-F は各尺度の名称を示す。

(Spence & Helmreich, 1978, p. 231-233より引用)

附表 3. Texas Social Behavior Inventory

以下の16項目について、自分がどこにあてはまるかを5段階で評定する。

(このインベントリーは、self-esteem を測定する尺度として使用されている)

- ① I am not likely to speak to people until they speak to me.
- ② I would describe myself as self-confident
- ③ I feel confident of my appearance.
- ④ I am a good mixer.
- ⑤ When in a group of people, I have trouble thinking of the right things to say.
- ⑥ When in a group of people, I usually do what the others want rather than make suggestions.
- ⑦ When I am in disagreement with other people, my opinion usually prevails.
- ⑧ I would describe myself as one who attempts to master situations.
- ⑨ Other people look up to me.
- ⑩ I enjoy social gatherings just to be with people.
- ⑪ I make a point of looking other people in the eye.
- ⑫ I cannot seem to get others to notice me.
- ⑬ I would rather not have very much responsibility for other people.
- ⑭ I feel comfortable being approached by someone in a position of authority.
- ⑮ I would describe myself as indecisive.
- ⑯ I have no doubts about my social competence.

(Spence & Helmreich, 1978, p. 234-236 から引用)